

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

6 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまでのスポーツアニメと「ひゃくえむ」が異なる点は、100m 走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は父性の導きも母性的な抱えもない裸の個として、生きることの意味をどう掴み取るのかが問われている。

Ⅱ. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

きょうだいトラウマにおけるトガシと小宮

ジュリエット・ミッチェルは、親子関係の垂直軸（父の法）に対し、きょうだい関係という水平軸（母の法）に着目した。新しいきょうだいの誕生により母との独占的な関係を失った子どもの心には、排除したいという激しい衝動が生まれる。母の法とは「排除したい相手と共に生きる」ことを求めるものであり、その根底には喪失の痛みが伴う。トガシと小宮は走ることを通じてきょうだいとなり、互いの存在によって走るものの質が変わり始めた。トガシにとっては意味のなかった走りに初めて他者が介在し、小宮にとっては孤独な自己処方ではなかった走りが「誰かと共にある」営みへと変わり始める。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切れ、それぞれに処理されなかった喪失と恐れが残った。その二人が高校生になり、インターハイの決勝で再び同じ舞台に立つ。

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

1) トガシのケース

高校に入り、走ることをやめていたトガシを変えたのは、浅草葵の存在であった。廃部寸前の弱小陸上部でただ一人、陸上への情熱を燃やし続ける葵は、トガシに走ることを求めた。しかしそれは、速さや結果を求めるものではなかった。葵はただ「100m を走るトガシ」という存在を受け入れたのである。

この受け入れが、トガシにとっての抱える環境（holding environment）となった。葵に抱えられることで、走ることが、誰かの期待に応えるための行為でも、意味を問われる行為でもなく、ただ無心に没頭できる「遊び」になったのである。それがウィニコットのいう潜在空間（potential space）であると考えられる。

そのなかでトガシは創造的で主体的になり、速さを取り戻し、父の重圧に押し潰され一時は走ることをやめていた仁神も陸上部へ復帰し、走る喜びを見出していく。葵の抱えの

もとで潜在空間に触れ、走ることを意味を取り戻していったトガシや仁神とは対照的に、小宮は財津との出会いを通じて父性的対象への理想化を強め、記録の世界という自己愛的な殻に閉じこもり、孤立を深めていく。

3) エディプスコンプレックス——父を超えること、父に潰されること

エディプスコンプレックスの核心にあるのは、「父を殺して、その座につきたい」という衝動と、その禁じられた願望に対する処罰への恐怖の間に引き裂かれる葛藤である。子どもは成長の中でこの葛藤と向き合い、やがて実際に父を倒すのではなく、父の存在を認めながら自分自身の道を歩んでいくという形で乗り越えていく。しかしこの葛藤が過度に強い場合や、向き合うための心理的な余裕がない場合、子どもはこの葛藤に押し潰されてしまうことがある。本作では、このエディプス葛藤が仁神と父親の関係に現れるだけでなく、小宮とトガシの関係にも現れ、小宮の高校時代の葛藤へとつながっていく。

小宮のケース

小宮は中学時代の怪我が癒えた後も全力で走ることができないでいた。この恐怖の奥には、小学時代のトガシを追い越すことへの無意識的な恐れが身体の次元に現れていた可能性がある。

転機を与えたのが財津との出会いであった。財津の講演で小宮は自ら質問に立ち、怪我が治ったのに全力が出せないと打ち明ける。財津は「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」と語りかけられる。このやりとりのなかで小宮はトガシに代わる新たな父性的対象を財津に見出したのである。その際小宮は「日本記録を塗り替える」という宣言したが、それは父親殺しの不安を、記録という目標の形に変換し前に進もうとする試みであった。

財津という父性的対象を得たことで、小宮はトップスピードに乗る怖さを克服し、記録は飛躍的に伸びていく。しかし小宮は、潜在空間を作る機会を得られず、より一層孤独な道へと進んでいく。

4) トガシと小宮の再会 処理されなかった喪失の重さ

インターハイの決勝、雨の中で二人は再会する。子ども時代に突然断ち切られた関係が、晴れやかな舞台ではなく雨の中で再び結ばれるということが、処理されなかった喪失の重さを暗示している。

決勝でトガシは小宮に敗れる。しかし走り終えた後、小宮がトガシに告げたのは「トガシくん、走り方、変わったね」という失望の言葉であった。小宮はずっとトガシを父性的な理想化された対象として追いかけてきた。「あのトガシに追いつき、追い越す」ことが小宮の走る意味であった。しかし目の前のトガシは、かつての走り方をしていない。葵に抱えられ、潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」とは別の存在になっている。

小宮はトガシに勝った。しかし勝利は空虚であるように感じられる。追い越すべき理想化された対象がもうそこにはいないのだから。「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼそのものが、この瞬間揺らぎ始めるのである。

IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

オデッセイ世代（新成人期）の理解

1. 定義と概念の変遷

- 呼称: 新成人期 (Emerging Adulthood)、オデッセイ (さまよい) の年月
- 年齢層: 主に 21 歳から 30 歳まで
- 歴史的背景:
 - 1962 年: ブロスが「後青年期」として先見的に概念化。
 - 2000 年: ジェームズ・アーネットが「新成人期」として正式に命名・体系化。
 - 2007 年: デイヴィッド・ブルックスの『ニューヨーク・タイムズ』論説により「オデッセイの年月」として一般に普及。

2. 時代的背景と「流動性」

- 成人への移行の先送り: 教育、経済的自立、結婚、親になること等の伝統的指標が 30 代まで先送りされている。
- 統一テーマ「流動性」: 職業、居住地、恋愛、目標が確定せず、常に模索と変化が

続く状態。

3. この年代の5つの心理的特徴

1. **アイデンティティの探求:**「自分は何者か」を模索する。
2. **不安定さ:**生活環境や関係が頻繁に変化する。
3. **自己充足 (Self-focus) :**他者への責任 (家族等) を負う前の準備期間。
4. **「狭間」の感覚:**青年でも成人でもないという不安定なアイデンティティ。
5. **可能性への期待:**将来の選択肢が開かれているという希望。

4. 発達心理学的な意義

- **「再中心化 (Recentering)」のプロセス:**
 - 青年期の成功体験が成人世界で通用しないことへの挫折・幻滅を経て、自分を再定義する時期。
 - 単なる迷走ではなく、成人社会に適応するための**不可欠な発達課題**である。
- **現代社会の必然:**成人への道のりが複雑化した現代において、若者が主体的に人生を構築するために必要な「さまよいの10年間」とであると捉える。

トガシの「あれから10年」は、オデッセイ世代の発達課題という観点から読み解くことができる。青年期から成人世界にかけての挫折と幻滅を経て、自分を再定義する「再中心化」のプロセスを辿る時期である。

トガシはインターハイ決勝で小宮に敗れ、「走り方、変わったね」と失望を告げられた。かつてのきょうだいから走りの質そのものを否定されたこの体験を引きずるように、実業団の陸上部に所属し続けていたが、成績は振るわず契約更新もままならない状況であった。本来この時期はアイデンティティの探求と可能性への期待を伴う創造的なさまよいの時間であるはずだが、トガシのさまよいには探求も期待もない。「明日生きるために死んでいた」と後に語るように、走る意味を見失ったまま惰性の中に留まっている。インターハイでの敗北と子ども時代の処理されなかった喪失が重なり、走ることを問い直す力を奪い続けていたのである。トガシの10年間は、オデッセイ世代としての発達課題に取り組めなかった停滞の時間であった。しかし後輩の樺木の忠告、海堂との出会い、そして日本選手権への決意が、ようやくトガシにとっての再中心化の始まりとなり、「なぜ

走るのか」「なぜ生きるのか」というアイデンティティの確立へとつながっていく。

1) 登場人物紹介

樺木（かばき）：トガシが所属する実業団陸上部の後輩。全盛期のトガシの走りを知っており、かつてのトガシに憧れを抱いている。契約更新に安堵するトガシに「変わった」と告げ、その言葉がトガシの中で沈んでいたものを揺さぶることになる。

海堂（かいどう）：日本陸上界のトップスプリンターの一人。天性の短距離の才能を持ち、高校時代にはインターハイ優勝を狙える位置にいたが、15歳の財津の出現以来、15年にわたり万年2位の現実を突きつけられ続けている。しかしその現実を知り尽くした上で、なお「次こそ自分が勝つ」と信じられる人物である。

森川（もりかわ）：インターハイ優勝の実績を持つ選手。大会前にトガシに握手を求め、トガシに憧れて陸上を始めたと語る。

2) 「変わった」という言葉の反復

インターハイから10年、トガシは実業団で陸上を続けていた。しかし成績はパッとせず、いつ契約を切られてもおかしくない状況にある。しかしそこに切迫感はない。戦いから身を引きつつあるかのような柔和さ。それは様々な喪失と現実を経てきたトガシのある種の成熟とも見える。クラインの言う抑うつポジション、すなわち万能感を手放し、現実の限界を受け入れて生きる姿勢が、そこにはあるようにも感じられる。

しかし後輩の樺木は、契約更新に安堵するトガシに「変わった」と告げる。かつてインターハイで小宮が「走り方、変わったね」と失望を込めて言ったのと同じ言葉が、ここで再び反復される。樺木の言葉は、全盛期のトガシの走りを知る者からの「あの頃に戻ってほしい」という願いであり、今のトガシへの落胆でもある。成熟した抑うつポジションに見えていたものは、本当に成熟であったのか。それとも走る意味を見失った諦めではなかったか。樺木の言葉は、穏やかさの下に埋もれていたトガシの中の何かに火をつけるのである。